
異世界の竜騎士物語

夏野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の竜騎士物語

【Zコード】

Z7597M

【作者名】

夏野

【あらすじ】

「ごく普通の小学生男子市川円ある日何の前触れもなく見たこともない森の中に居た。何が原因なのか、足りない頭をひねる少年。しかし彼の周囲の状況は否応もなく、異なる世界の変革の渦へと彼を押し流す。再び日本の土を彼は踏むことができるのか。

第一夜 当惑の世界レイスフィア（前書き）

本作品は基本的にハッピーエンド至上主義です。本作品は微ラブコメ、微エッチ成分を含みます。食べられません。主人公は年上の女子から好かれやすいですが、執筆者の願望はかけらも入つてません。
…入つてませんてば。

最後に、楽しんでくれると執筆者は浮かれます。

第一夜 当惑の世界レイスファ

「えーと……とつあえず「レバ」よ?」

パジャマに素足の少年は眠たげな顔で呆然とつぶやく。目の前には見渡す限りの森が広がっていた。自分で口に出した言葉に遅れてじわじわと実感する。深夜までついついオンラインゲームにいそしんだ後、ベッドに飛び込んで 気づいたら枕を持つて森の中にいたのである。思いつき頬をつねつてひとしきり悶絶して眠気は冷めた。今の状況を現実であることを認識した瞬間、一気に外気の冷たさに気づいて身震いする。

『夜で真冬並みの寒さと来た ついてないねえ、……』
見渡す限り明かりは見えない。「人里離れた森の奥ってか? ますますついてない。」

ぼやいてハードボイルドに決めてはみたものの、朝が来る前に
兵庫県在住の六甲第一小学校5年生市川田君まじかが 山中で凍死
体で発見されました なあんて報道されてしまいかねない。

いやだッ……間抜けすぎるぞっ、パジャマに枕持つて山中で生き倒れとか…

神よつなぜ僕はこんなとこに
……ん? 神様? ばちがあたつたのかつ
もしかして。

一昨年夏休みに神社の御神木を蹴つてカブトムシ集めたのが
いけなかつたのか

小三のチビジモをカツアゲしてた中学生に爆竹投げつけて成

敗したことか

ロケット花火水平発射事件のことか？……

なんかもう余罪まで含めたらすげえダメな子みたいじ
やん、僕。

結局、神様から肯定も否定も言葉は返つてこないので、いつた
ん考えないことにする。落ち込むより先に、暖をとる場所を見つけ
ないとリアルに野垂れ死ぬので、民家もしくは洞窟を探そうとする
が、見渡す限りの闇。素足という悪条件も加味して、移動できる範
囲の中に本当に安全地帯があるのか絶望的に感じる。

までよ。朝まで運動してりや死なないかも？体動かすとあつたま
るし。朝になれば視界も開けるだろうしな。

45分後木にもたれかかって汗だくの馬鹿が一匹出来上がり
つていた。

『円は小学校の授業時間フルが活動限界と判明
した。』

レベルアップとかじゃねーから。ぐつたりしながらゲーム脳の自
分に一人突っ込みを入れる。本当に死んじゃうかも知んない。地面
に寝転がってぽつんとそんな事を思つ。満月が一つ、煌々と雲間か
ら出始めていた。

本当にどうなんだよ？

第一夜 当惑の世界レイスフィア（後書き）

90年代のファンタジーアニメ（ラブコメあり）が大好きで大好きで仕方ありません。（神秘の世界エルハザード

天地無用！ セイバー・マリオネット） etc）

私が当時感じた魂の高揚を少しでも人に分けてみたくなったんですね。

少しでも樂しいって思つてくれたら幸いです。

第一夜 疾走の世界レイスファイア（前書き）

一話で言い忘れてましたが（書き忘れですね…すいません）、円が飛ばされた世界はレイスファイアって呼ばれております。言ひ方と言つたし

さて、第一夜の帳を開こうか？

第一夜 疾走の世界レイスファイア

リー・シャ side >

「追えつ！…逃がすな」

「森に入つたぞ」

ソグド皇国第38皇女リーシャ・ユル・ソグディアは必死に走っていた。なんとなれば隣国

カステイール帝国軍の襲撃を受け、乗つていた馬車は大破、従者は全員殺されたのだ。

帝都スイルベーンで開かれていた三国会議開催中の夜会の最終夜の最中に勃発したクーデターの混乱の中、リー・シャは素早く自国の宿舎にたどりつき、馬車で皇国を目指した、ところが、だ。素早く帝都を制圧し、各国の重鎮を人質に取つた反乱軍のリーダーはソグドからの賓客が脱出したのを察知し、軍を動かしたのである。

捕まつたらどうなつてしまふのか恐ろしくて気が遠くなりそうになる。風の加護を足に付加しているが、4時間も走り詰めなのだ。体が先に参つてしまいそうだが、ここで捕まるわけにはいかない。

父、ソグド皇ムジカ・エル・ソグディアには血族への情など一切ない。父ならば、むしろただの負債が外交カードの一枚に大化けしたと舌舐めめずりをするかもしれない。心が挫けてしまいそうになりながらも、父親の権力欲の玩具になることへの反発がリー・シャの足に鞭を打つていた。

「いや…もういやいやいやあああ

頭を振りながら叫びながらその長いドレスに躊躇かけてそれでも彼女はひた走る。この 黒い森 はカステイールとの国境だ。これを抜けさえすれば希望がある。だんだん近くに聞こえる甲冑の触

れ合ひつ音と足音に怯えながら彼女は走っていた。

「止まれええええ」

甲冑を着た騎士の1人が叫びながらリーシャの肩へ手を伸ばした。リーシャは必死で前に飛び出した。

マドカ s.i.d.e. >

「…「うるさいな」

段々と夜が白んできたころ、円は眼を開けた。結局眠くなったり寒くなつたら動いて、温まつたら座つて休憩を繰り返していた円だったが途中から立つたまま意識を失い、木にもたれかかって寝ていたのだった。どうやら凍死はしていないようだが、金属音や枝葉をかき分ける音が聞こえて目が覚めたのだろう。

「 * * * @ ! ! ! ! !

男の興奮して荒げた声が聞こえた。少し遅れて円の目の前の茂みから、女性が飛び出してきた。褐色の肌に、走っているときにつけてあるう枝葉のまとわりつく銀髪をたなびかせた背の高い女性だ。

一瞬円と女性は見つめあう形になつた。綺麗な人だなどという感想を寝不足の脳みそにぼんやりと浮かばせたまま正面衝突した。膝が顔面に入りました。いひやい。鼻を押さえつつふらふら立ち上がると、そこには心配そうに顔を覗き込む美人な加害者さんと、不穏な空気で自分たちを取り囲む甲冑のおじさま方。

「

血走った眼で剣を振り上げてなんかよくわかんない言葉でしゃべっている。金髪で青目な時点で日本人じゃないし、そもそもこのご時世に甲冑に剣とは随分とレトロ趣味ではある。

追われていた女性は僕をかばつて甲冑野郎と僕の間に立ち、男たちを睨みつけた。無関係そうな僕なんか置いて逃げればいいものを。少しは自分を優先しようよ。呆れながら男たちを観察する。手ぶらの女性一人に六人とは卑怯が過ぎないかい。僕は手元の目覚まし時計を振りかざしてベルを鳴らし、枕とともに思いつき先頭のコスプレさんに投げつけて女性の手を取つて走り出した。

「おととこきやがれっ」

中指を立て舌を突き出して挑発のおまけつきだ。

第一夜 疾走の世界レイスフィア（後書き）

：前書きでかつこつけて気付いたことがあります。
あのね、物語の中では一夜開けてないんだ（アハハハ
気にしないで行こう。

第三夜 邂逅の世界レイスフィア（前書き）

一話一話の分量バラバラですすいません。

第三夜 邂逅の世界レイスファ

リーシャ side>

見知らぬ少女の足はすごく速かつた。リーシャの一回りは小さい
その少女は、彼女の顔面飛び膝蹴りをもろに受けながらもすぐに立
ち上がりて、枕と騒音をたてる見知らぬ器械を兵士に投げつけ、彼
女の手を引いて走り出したのだ。少女がカステイール軍の兵士に向
けてはなった言葉は彼女の知らない言葉だった。飛ぶような速度で
森を抜けてしまつた少女とリーシャはしばらく息を整えていたが、
先に少女から話しかけてきた。

「

苦笑しながらリーシャは少女の耳に風の加護を掛けた。少女は精
靈の加護を見て驚いたようにわたわたとしている。動きが山リスの
よひで愛らしい。

「私の言葉がわかる?」

またまた驚いたようで今度は自分の耳たぶを引っ張つている。あ
わてたように頷いている。勢いよく何度も首を振るものだから細い
首がもげないか心配になつてしまつ。

「あなたの耳に風の加護を掛けたの。言葉の壁を取り払ってくれる
けど、あなたの言葉は私にはわからないままなの。この指輪を填め
て。そうすればあなたの言葉が私にわかりますし、私の言葉もあな
たに通じますから」

そつと安心させるように微笑みながら少女の小さい掌を握つて指
輪を親指にはめてやる。リーシャ用の指輪は少女の指には大きかつ
たようだ。不思議そうに指輪を見つめながら、

「えと、通じてますか」

鈴のよくな透明感のある声で問いかけてきた。上田遣いでありますね」と指輪に向かつて話している。

可愛すぎるひ おっといけない。

「ええ。別に指輪に向けて話さなくても大丈夫よ。っと、まずはお礼とお詫びを申し上げなくてはいけませんね。助けてくれてありがとうございました。それから、膝蹴りは他意はなかつたんですよ?ほんとうに」「めんなさい。あとで手当しますね。私はリーシャ・ゴル・ソグティアと申します」

「市三円…です。あの別に大した」とじゃないから気にしないでください。怪我ないです」

一気に言つて少女は俯いてしまつ。つややかな黒髪は前と横は長く後ろをうなじ辺りまで刈つてあり、細い首が見える。伏し目がちな瞳は漆黒で睫毛は細く長い。薄く土埃のついた寝巻の様なものを纏つて素足だ。ほんの八、九歳にみえる。

「イチカワマドカ?珍しい名前ね?」小首をかしげながら問うリーシャ。

「あーえと姓がイチカワでマドカが名前なんだ…です」

両手を田の前でぶんぶんと振りながら田の前の少女 マドカが答える。

「無理にかしこまらなくていいこのよ、マドカ。私ことリーシャって呼んで。あなたこの近くの子ではないでしょうか?だから来たの?」

口ごもつて遠い眼をするマドカ。聞いてはいけないことを聞いてしまったのかしら……。

「信じられないかもしないけど……自分の部屋で寝て田が覚めたら寝たときの恰好のままあそこにいたんだ」

「それで月が一つもあるのを見たから、ここは元のところと違う世界なのかなって思うんだけど」

「……言葉も通じなかつたでしよう?髪の毛の色とか眼の色とか肌の色全然違うし。」

お姉さんの耳僕と形違うし とマドカはおそるおそる付け加えた。

「落ち着いてマドカ。ここはレイスフィアと呼ばれている世界で、私たちは今ソグドという国にいるの」

少し額に眉を寄せて難しそうな顔になるマドカ。ほんとうに口コロと表情は変わるし、感情の読みやすい小動物のようだ。近くにこんなに可愛い生き物なんていなかつたなあ。

「じゃあリー・シャ…さんて」

「リー・シャ」

「リー・シャ」

「リー・シャ」

ちょっと照れているマドカが見たくてつい彼女の唇を人差し指でふさぐ。

「リー・シャは偉い人なの?苗字にソグディアって入ってるし意外と觀察力とか注意力は高いようだ。

「父親が田舎貴族ってだけよ。それよりあなた、客人 まれびとなのか?」

「まれびとつてなあに?」

きょとんとした顔で問い合わせるマドカ。かわいい…かわいすぎる。「異世界からこちらに来る人がたまにいるの。その人たちのことをめつたに訪れない客人だからまれびとつていうのよ

「僕以外にもあっちから来た人つているんだ?」

ええ、と相槌をうちながらあらためてリー・シャはマドカを眺める。(妹にしたいくらいかわいいな)

ひとまずは意志疎通できたことに安心する。「ミニアケーションは円滑な人間関係に必須だよね」とかみしめる。少しほんやりとこちらを見つめているリーシャを見ながら（とりあえずここのは教えてもらえそうだなー）と円は計算していた。

リーシャ side >

くしゅんっ

「マドカ？顔色良くないけどあなた大丈夫なの？一晩中そんな恰好で外にいたんでしょう？ちょっと破けてるけど被つておきなさいな」自分の羽織っていた外套を田の前の少女にかぶせる。短めの上着なのに背丈の差でほとんどワンピースになった。

「リーシャのにおいがする」

襟元をつまんで首をすくめて外套に包まる仕草が愛らしい。

「と、とりあえず私のうちは近くだから、そこで今後のことを考えましよう。マドカも私も休まないといけないしね。」

リーシャの家は「冗談のように広かつた。

第三夜 邂逅の世界レイスフィア（後書き）

やつと家にヒロインが帰りました。

マドカが普段着るまでどれくらいかかるだろ？

あ、リーシャはマドカを女の子と誤解しています。やつこの好きで

して…すこませ（ゝゝ

第四夜 再会の世界レイスファイア

室敷の呼び鈴を叩いてリーシャは一步下がった。

途端に赤毛の小柄な人影が勢いよく飛び出す。メイドさんでした。

もう驚かないよ。セバスチャン（執事）が出てきても。

マトカが変な感心をして、Nanはメトコをワーラー・シャに飛
びついた。

本当にほつく

「ごめんね 心配掛けで… でも無事よ 大丈夫だからね もう大丈

「…お出になる時も私をお連れください。姫様の御留守の間、生きた心地がしませんでしたつ…ほんとうですよ?」
背の高いリーシャと小柄なライカは仲睦まじい姉妹のように再会

しばらくしてリーシャはマドカの方を振り返り、あの子が命の恩人

よとテイカに囁いた

よ、やぐりー シヤか1人でないことは気付いたライカは癪巻の少女を見つめる。

寝巻の少女も負けじと見返す。

ジ
C

二
一

かくん。

突如前触れもなしに、寝巻の少女はパタリと倒れた。

「マドカッ！…どうしたの、マドカッ！返事して…何処か怪我してるの？」

「うわわわわ大丈夫〜？？？」

二人の少女のあわてる様を尻目にマドカは徹夜の疲れで倒れたのだった。

すーつすーつ……

（寝てるだけみたいね。たぶん一晩中走って疲れたんでしょう。ライカ、人を呼んで運んであげて。起こさないようにね）

（姫様…悪い子じゃなさそうですが…この子の素性は確かなんですか？）

（…それはちよつといじりや話せないの、後で話すわ）

マドカ s.i.d.e >

気づくと知らない天井。どれくらい倒れていたんだろうか。

「う…ここはど「気付いたかああああああああああああああああ少年んんんんん」」

オールバックの紳士が吠えていた。

思わず飛び上がったマドカは壁際まで猛スピードで後ずさった。

「そんなに怯えることもなかろつ。姫様の命の恩人ということだしな。気合いを入れてもなさねばならぬのだッ」

同じ速度で並行してマドカに詰め寄る。

「そうだ！申し遅れたが鷺はセバスチャン…当家の執事長であるツ…宜しく頼むぞマドカ殿っ」

あわててマドカはがくがくと首を振る。

「嘘言つてすいませんセバスチャンにめりちゃビビつました

「丸一日寝ておったのだ。何か作りせよう。好きなものがあつたら遠慮なく申しつけてくれいっ」

執事つてこいつ口調でいいのかな…。マドカは呆然としつつそんな事を思う。執事長に催促されるままに好物を思い浮かべていると、賑やかな足音が聞こえてきた。

「まつたく、姫様は直すよう申し上げても一向にお転婆が治らぬ。嘆かわしいっ」

鼻息荒く嘆く執事長、軍人のが向いてんじやねえのと思つ。

「ハイ執事長はどいたどいたー マドカに似合ひやうな服持つてきたの！寝巻でつるつるのよくなないしね。私の子供のこりの服で悪いんだけど」

「ひ、ひめさま～～～」

リーシャとメイドさんが部屋になだれ込んできた。めいどさん、たしかライカって名前だっけ？ 150cmもないんじやあるまい。年上なのに年下に見えるつてのは何とも不思議な人だ。

「いきなり倒れちゃつたから焦つたけど、過労だつて。丸一日寝てたしもう平氣？」

小首をかしげるリーシャ。改めてみると美人だなおい。アラビアの御姫様みたいな恰好をしている。ゆつたりしたすそを絞つたパンツに細身のエスニックな柄シャツ、ショール・・・かな。

「うん・・・あ、はい。平氣です、でもお腹がすいちゃつて」

「かしこまらないで！ あなたは私の命の恩人なのよ～自分の家だと思つてくつろいで」

そう言われても使用人さんの心象つるものがあるでしょ？」

「分かった・・・」

仕事に戻らうとする執事長とライカさんを呼びとめる。

「あの、申し遅れました。市川円といいます。執事長とライカさんにはいきなりお手数をお掛けしました。すみません」
二人は一瞬驚いたように見えたが、礼には及ばないと微笑つて言つてくれた。

リーシャ side >

寝室から執事長を武力排除した後、お腹を鳴らしながら抵抗するマドカに一人の淑女が忍び寄る。

「えと…自分でできますっ！着替えるからみないでっ…そ、そこはダメですって、ちょ、あ…」

必死に自分の体を隠そうとするマドカ。

なんだか変な気分になつてきたわ。

「姫様…私ちょっと楽しくなつてきました」

「へ？」

「ライカ！奇遇ね、私もなの」

「え・・・」

「マドカ様？痛くないですよ～、怖くないですよ～、きれいに」
なりましょづね」

キヤー

その日何度も、リーシャ邸では絹を裂くような少女の悲鳴があがつたといつ。

第四夜 再会の世界レイスフィア（後書き）

脱衣の世界のほうがタイトル詐欺じゃなかつた気がしてきた・・・
感動の再会だつたはずなのに・・・アルエ

ですがようやく主人公が外着を着ます！

第五夜 胎動の世界レイスフィア（前書き）

分かりやすい構図です。展開もみえみえです。・・・だが王道が好きな作者にスキはなかつた（キリッ）

調子こいてすいません。感想で視点変更ないほうが好みという感想をいただきました。ありがとうございます。今回からなしにします。第四夜までは、また後ほどに再編集します。

第五夜 胎動の世界レイスファ

ソグド皇国皇都ザナルカンドは皇居の一室に一人の男がいた。一方の男、ソグド皇ムジカ・エル・ソグティアは苦々しく間者の報告を聞いた。

「死なんんだか・・・つまらん! 帝国へのカードの一つにでもならねば、リーシャなどただの負債に過ぎぬといふに」

影のように姿かたちが判然としないもうひとりの男は膝をつきながら口をまた開いた。

「魔王様・・・その」判断は早計やも知れませぬぞ

「ほう? 使えそうな駒でもあつたか?」

「リーシャ様の御生還の件ですが、黒い森で黒髪の少女が手を貸したそうです。カスティールの追手によると、知らない言葉を話したとか。客^{まれびと}人の可能性が高いと思われます」

にたり、と魔王は晒つ。

「それは面白い・・・ひどくおもしろいなあ

魔王はクツクツと晒つ。久しい感情、享楽に酔つていた。

「リーシャのばかっ！ライカのあほつ！」

マドカは腕で身体をかばいながら、潤んだ瞳でレジナを睨んでくる。

「ごめんごめん。つい可愛くてね・・・反応が。でも男の娘だったのかあ・・・びっくりしたわ」

「ニアンスに不穏感を感じるんだけど・・・」

「ぶすっとした表情でも少じよ・・・少年は愛らしさを失わない。
(ああもうかわいいなあ)

「分かつてない・・・絶対反省してない（ブツブツ

「マドカ様・・・申し訳ありません・・・」ライカは眉をハの字にしながら謝る。

「・・・きれーなお姉さんにひんむかれるってのはなかなかできる経験じゃないけどせ・・・意識しちゃうじやんか

「ほそつとつぶやく。

「ん？」

「なんでもないっ！！」

「きれいつて書つてくれぬのせうれしいな」

「あ・・・わいべてゐるんじやんかあーー。」

「で・・・追われてた理由とか、そこらへんなんだけどね？」
リーシャが何でもなかつたように話を変える。

「では私からお話しします・・・」赤毛の小柄なメイドは語り始め
る。

「正直に言いますが、マドカ様の立場はかなり難しいものです・・。まれびとは自治領を持つ代わりとして帝国と皇国に干渉しないことになつていいのです。たとえ、こちらにいらした直後とはいえ、ソグドの皇女を救出されたのですから」

レイスフィアにおいて客人は数からいつてそう珍しいものではない。しかし、異世界の技術を持ち込んだ彼らは1人の指導者の下自治領を獲得し、帝国にも皇国にとつても脅威になつていた。今のレイスフィアは東の帝国、まれびと西の皇国、南の自治領が霸を競う三国時代といえる。その中で、客人が皇国に味方したとなれば、その波紋はすぐにレイスフィア全土を揺るがすことになるだろう。

「……つんまあ一応ね。といつても皇位継承権が38番田だから、まあまあ回つてこないわ。」

ライカがたしなめるようリーシャを窺う。
首をすくめながらリーシャはマドカにいつ。

「気にしないでね。ライカ以外の友達が初めてできとうれしかった
の……」

「う……。別にいまさら態度変えれないし、リーシャいなきや野
垂れ死んでたよきっと。
迷惑掛けたくないんだ。ここにいてもいいのか聞きたかっただけで。
このままだとあるすると厚意に甘えちゃいやうだから」

少しそっぽを向いてマドカはぼやつと言へ。

「まあ田舎貴族の氣楽さと皇族特権があるからね、大概のことほな
んとかなるよ。
それより、『家族も心配されてるだろ』じ早く還る手段見つけないと」

「でもや、聞いた感じだとこっちに来てあっちに還ったヤツなんて
いないんでしょ？」

「あきらめがちだめだよ。きっと大丈夫って精霊達も言つてゐるよ。」

「せ……いい？ そつこや初めて会つた時にも風の加護とか言つ
てたけど……」

「わたしみたいにエルフの血が混じっていると精霊魔法が使えるの。
まあ私はクォーターだから、風の精霊さんとだけ契約できたのだけ
どね」

なんちゅーファンタジーだおい。まあ耳が細長くて尖ってるし、
ビジュアル的には納得なんだけど。風の精霊さんだから異世界人の
マドカと意思疎通できたんだ～よかつた～と能天気に笑うリーシ
ヤを見ると、常識とかを捨てなきゃどうしようもないと分かった。

・・・それ以前に異世界だしな。

第五夜 胎動の世界レイスフィア（後書き）

「…」が、どうやらアーティアには辛い異世界の現実ってやつに直面することになります。

第六夜 別離の世界レイスフィア（前書き）

今回は少し前五話と雰囲気を変えました。序章の終わりにふさわしい語りになつていると嬉しいですね。第5夜で書いた試練はこれからになります。第7夜以降をお待ちください。
それでは第六夜の帳を開きましょう

第六夜 別離の世界レイスファイア

早朝、皇國の辺境イスファーンはリーシャ邸の一室。

「執事長！その話は本当なの？」リーシヤが顔色を変えた。
「「こんな」とじええ嘘をお申し上げても私めえに益などあつてません
ぬう」

執事長の顔色もすぐれない!

先日の帝都スイルベーンからの生還劇についての報告を皇都ザナルカンド側が要求してきたのだ。それだけならばマドカのことをぼかすこともできたのだが、協力者の素性までも要求に入つており、逃げ場はなかつた。

「…そうですね」

父がここまで早く動いてくるとは予想できなかつた。

いや予見できたはずなのに。マドカと過ごす時間が自分の危機意識を麻痺させていたのかもしれない。一週間に満たないとはいえ、初めての対等な友人だつたのだ。憩いの時間が思いのほか自分の心を解きほぐしてくれたのかもしれない。

姫様

ライカも不安げにリーシャを窺う。肩を震わせてうつむく長身の美女の表情は見えない。きっと理不尽さに涙を浮かべているのだろう

「ひねた・・・」

幽鬼のような表情でクツクツと晒つ皇女。

(「……いつもひぬたまじやないつ！？誰かどうにかしてー）

「絶対に手放さないわ。私の初めての友達なのよ？一つぐらい私の本当に望むものが手に入つてもいいでしょ？ねえ？ライカ。そうは思わなくて？」

がつしじと両肩をつかまれ揺さぶられる赤毛メイド。

「ひやいせつおもいみやふえええええ」

（うわっ！？外れないつ！姫様こんなに力もちさんでしたっけええええええええええええ）

「父上……いえ、魔王ムジカ・エル・ソグティア……覚悟しなさい。もともとあなた気に食わなかつたのよ」

使用者たちは、皇女殿下の怒気に呼応するかのように騒ぐ風の精霊に慄いたといつ。

「いいよ～。証言すればいいんでしょう？都見物できるの～？」

「ええ。ですけど……お気を付けくださいね……ソグド皇は野

心的なお方ですから」

「こんなことが魔王陛下のお耳に入つたら私は打ち首ですけどねーと
氣弱に笑うライカさん。

「それに、姫様の『機嫌も芳しくないんです・・・』

「確かにねー。横暴な親御さんだよね・・・どうせ話を聞く限りじ
や、帝都の祝賀パーティにリーシャを行かせた件だって、安否を氣
遣つた節がないものね。そりゃ荒れるよ」

「そつ言つてうんうんと頷くマドカ様。ああああもつつ違いますよ
。姫様は御父上があなたを政治の道具にしようとしたことで逆鱗
を・・・本当の逆鱗を逆立ててしまつたのですから

「大丈夫だよ　　ライカさん。リーシャのこと好きだからや、守
りきつて見せる」

自分のこともね?と不敵に笑う少年。そつ、悪戯っ子のようになど
けなく大胆に。だけれどそこには言い知れぬ威圧感があつた。

リーシャってね、向こうに居る　　たつた一人の家族に、叔母さ
んに似てるんだ。外見じゃなくて雰囲気がね・・・。初めて会つた
時、この世界に突然来て訳わからなくて、頭からっぽでさあ、でも
リーシャがいたから間違えずに済んだんだ。

だから、どんなことがあっても離れないし守つて見せるよ
そつ言つて拳を前に出す。

「ライカさんも拳をつくりて前に出して　　そつ」

そして、少年は突き出した右の拳を赤毛の小柄なメイドの右拳に軽くぶつける。

「仲間内での約束の印なんだ。こうして誓つたことは絶対守る決まりなんだ。」

だから嘘偽りなく守るよと少年は言つ。

「・・・分かりました。お嬢様を、リーシャ様をマドカ様・・・いえマドカ殿にお任せします。それから・・・言つまでもありませんが、御一緒にお戻りになつてくださいね」

凛々しいライカさんつてきれいで格好いいよと円は微笑う。

いつもきれいで格好いいでしう、と澄まして胸を張るライカは、やつぱりいつもの背が低い子犬のようなライカで。

二人はこらえきれずに噴き出す。

不安を蹴飛ばすよう

「皇都にはこの口達で行くのよー」

出立の日、厭かと思っていた場所にはつぶらなお皿のサラブレッドさん達は居らず、翼竜^{ワイバーン}達が佇んでいた。見知らぬマドカに興味を惹かれたのか、どうやら繋がっていないワイバーン達はマドカを取り囲む。

ぐるああああつ！

説小治政の歴史

マドカを見定めるよつて視線を外さず6メートルほどの体躯で威圧するワイバーン達。

マドカは物おじせず見返す。もともと指輪物語やパーンの竜騎士シリーズにはまるなど、小学生にしてはディープにファンタジーの世界に漬かっていた。ファンタジーが目の中で息づいているのだ。目をそらす理由がない。熱のこもった眼でワイバーン達を見つめ返す。自然と口が開いた。

「リーシヤ様に拾われた異界の民草です。本来ならあなたの方の背に乗る栄誉など持ち合わせぬ身ですが、奇縁も縁の内と申します。今日は皇都までの道中宜しくお願ひ致します」

いと小さき人の子よ！！その小氣味よいあいさつ氣にいつたつ！
リーシャ様のことは宜しく頼むぞ！少年よ！

お三には不思議な品札を感づる。追口のことを心配するが、
！ 京都は魔窟。ゆめゆめ油断めあるなよツ

頭蓋に直接、言葉が響く。マドカは美しく力強い意思が自分に満ちるのを感じる。

「おの子たちが世間で話題にならねえかね、丁寧なまことわつだ」と頷うなづく。あつ

翼竜たちは茶田の氣たつぶりにワインクをした。
内緒つてことね、分かつたよ

「いきなり意氣投合したの？すごいわね。普通は私の言うことしかほとんど聞かないのよー？」この「達」ライカなんて蛇に睨まれた蛙のようになっちゃうんだから、というリーシャ。

「あんまりヒトには好かれないんだけどねー」

二人は談笑しながら、乗騎服を纏う。フライトイジャケットに似た上着に耳垂れ付き帽子に風防ゴーグル、カーボパンツ、革のブーツ。屋敷の前の広い草原に屋敷中の使用人たちが並ぶ。ライカと、執事長の姿もある。

「行つてきます」
「姫様を宜しくお願ひします」
「・・・御無事で」

翼竜の羽ばたきで気流が生まれ、縁のざわめく中、主従は一旦の別離の挨拶を交わす。

護衛一人を引き連れて四騎のワイバーンは飛び立った。

目指すは皇都ザナルカンド、権謀術数の魔都。

第六夜 別離の世界レイスフィア（後書き）

メイドさんはメインヒロインじゃありませんし、マドカとメイドさんのフラグではないんです、ええ。二人はリーシャ大好き同盟の同志といった仲になつていきます。ハーレムフラグを期待した方！残念ながらマドカを軸にする気はないです。ごめんな。

あと、遅ればせながら、お気に入り登録が一件ですと！！ありがとうございます。感想も励みになりました。これからもモリモリ書きます。宜しくお願いします（ペニ

第七夜 激動の世界レイスフィア（前書き）

一章の始まりです。勢力はひとつにまとまつてしまつても文章量が増えしていくな。

第七夜 激動の世界レイスフィア

「そうですか……それで、カードは今どこに？」

「いまは皇都へ高速移動中とのことです……おそらく熱源と速度からワイヤーバーンかと思われます」

自治領の首脳陣は仄暗い室内で密談を交わす。

部屋の中には三人の男がいた。

眼鏡を掛けた白衣の長身瘦躯の男。

小太りの三つ揃いのスーツの男。

中肉中背の灰色の背広の男。

この三人が自治領の最高権力者だった。

問い合わせを得て満足そうに頷いた中肉中背の男は朗々と語り始める。

「不可侵条約は我々の技術力があちら（皇国と帝国）の数の脅威を振り払えるからこそ、実効性があるのです。今、侵攻事由を渡したてしかし、この自治領は搖るぎません。それよりも、この事態は我々に明らかに利するものですよ。永い間、三竦みだつたこのレイスフィアの天秤が、ここにきてようやく軋みを見せ始めました。その鍵が、客人、我々の懐かしき地球の人間だというのですから

これほど愉快なこともありますまい つふうつくづく

くはつ あははははははあ

ひとしきり晒すと、歪んだ笑みを更に歪ませて、血走った眼で叫ぶ。
「愉しもうではありませんか……力を蓄え、雌伏を続けた日々に別れをつ、旧時代的な野蛮な異世界人どもにこのレイスフィアを牛耳らせる時代は、もう終わりです！！そう……まさに旧時代の終

わりを、レイスフィアの幼年期を我々が終わらせるのですよっ…
科学の灯でっ」

残り一人の男達は追従するかのように愉快そうに、心底嬉しそうに嗤い始めた。

暗い会議室に二重の高笑いは不気味に響いた。

「うひょおおおおーきもつちええええええええええええええ…！」

ワイバーンを駆るマドカ一行。

不思議なことに一行の中で一番翼竜を上手く扱えているのは、一番経験の浅いマドカだった。

マドカ殿には恐怖心の欠片もないな…

呆れたような思念波がマドカにのみ届く。

マドカの乗っている翼竜はイシュトヴァンといつも前と同じ。ここ数時間でイシュトと呼ぶほどに仲が良くなっていた。

しかしエルフって動物とか幻獣とか妖精とか精霊とかと意思疎通できるってイメージだけどな…。

リーシャはイシュトたちの「声」が聴こえない。

リーシャ殿は…今精霊たちの声もあまり聴こなくなってきた
ているのだよ…

ほかの二頭も首肯の思念をマドカに送る。

「口口口の女帝がなければ我々の声は正しく届かないのだ

（やつぱ、ソグド皇・・・お父さんだわ）

・・・それだけとは限りぬがな

「不思議な御子ですね。騎竜と長年通じ合っている歴戦の竜騎士の
ようだ」

「真に」

「そうね・・・時々ひどく頼りになる表情とか雰囲気を醸すのよ・・・
・ずるい子だわ」

後半は小声で護衛たちには聞き取れない。

皇都ザナルカンドへは騎竜を飛ばして丸三日といつた距離だ。
そろそろ、日も陰る頃合いである。一行は高度と速度を落とした。
真下に広がる森林地帯へと着陸する予定だった。

ドンッ

つるぎくよつの轟音とともに多少先行していたマドカとイシコト、ヴァンを砲撃が直撃した。

「マドカッ」

「なつ」

「いつたい何処から」

四方に砲手の影も姿も見えない。

それ以前に、リーシャは弾丸ではなく赤黒い光線なぞを発する兵器はレイスフィアに存在すると聞いたこともなかつた。精靈王と契約していた古のエルフならいざ知らず、ワイバーン種を一撃で墜とすなど現代の魔法遣いには不可能だ。少なくともリーシャにその術はない。

（どうなつてゐのうどうしてマドカがうどうすればいいの 精靈さん達、マド力を助けてつ）

いつもは見える精靈達が見えない。いつも聞こえる鈴の音の様な声も聞こえない。

奇跡が起きない。

みる見る白煙と赤い血しぶきを噴きながら翼竜は地面へと墜ちていく。

ここでなんとかしないと、一人が死ぬつ

出でよつ

ここで使えなきや何のための魔法なの
ハーフエルフである意味がないじゃない

焦るほどに精靈の気配を見失う。護衛達は我を失つた主人を諫めるのを諦め、ワイヤーバーンを駆つて二頭の高度を下げさせた。

「姫殿下！…御氣を確かに」

「落ち着かれなれば、マドカ様を御救いすることすらかないませぬぞ！…！」

「分かつてゐつ！…だけど、だけビマドカがつ 死んじやうつ」

護衛の1人はリーシャの背後に飛び移ると、手刀でリーシャの意識を刈り取つた。

「無礼を承知でつ！今は非常事態故、御容赦を」

そのままリーシャの騎竜を駆つて森の中に着陸する。もう一人の護衛は残りの翼竜とともに続いた。

グアアアアアアアアアアアア

「おいつ！イシュトッ！大丈夫か！氣をしつかり持てつ」

マドカ！－ツグツ・・・主も味わってみてから言つのだな！

「ひ・・・人が心配してやつてるのになんちゅ一憎まれ口をツ」

いずれにしろ森の中に着陸しても……」の状況だと墜落か……

しかし一介の小学生で、なんの特殊な技能を持ち合わせたわけでもなく、この状況で何かできることってん？特殊技能？

ないか？それにリーシャにもらつた指輪。

「つ、一か八がだ、風の精霊！！今この場にいるなら僕に応えろ！！！奇跡を起こして見せろおおおおおおおおおおおおおお

しんつ。

(デスヨネー)

! !

叫ぶなー！ 傷に触るなー！

緑の森へと一人と一頭は吸い込まれていった。

第七夜 激動の世界レイスフィア（後書き）

主人公は今のところワイルドマンと会話できる以外に能力は持ち合わせおりません。タイトルの意味が通じるまであともう少しだけ、カッコイイ主人公のターンを乞うご期待！！

そうそう！お気に入り登録が三件に増えました！！

まだ少ない話数でこんなに気に入つていただけて感謝しております。御感想、御意見も励みにさせていただいております。

これからも宜しくお願いします。

第八夜 契約の世界レイスファ

リーシャは護衛を振り切つて駆けずり回つた。しかし指輪の魔力をたどろくにも、精霊を感じできない今の自分にはどうすることもできないと分かつていた。

護衛たちはワイバーン同士の念話を頼りに探したが、イシュトの気配を三頭が察知できない様子を見て今日の搜索を断念するよう進言した。

どうして応えてくれないの

私何かしたのかなあ

精霊さん

マドカのことを守つて

お願い

自治領の統治府

「ワイバーンのみ撃墜との報告がありましたーカードはいまだ健在」

「そうですか・・・しかしあの高さから落ちて無事はありえないでしがね。アシを潰しましたからね・・・徒歩での森を子供が独力で越えるはずはないです」

眼鏡の男は葉巻に火をつけながら満足そうに騒ぐ。背もたれに沈みながらくつくつと。

「一応手は打つておきましょう・・・クーデタでうち漏らした三十番目の皇女殿下もまとめてね」

「生きてるかあ？」

なんとかな。マドカの方こそ怪我はないのか？

「不思議とね。あんだけのオーバーテクノロジーなら、イシュトも
ろとも原子レベルまで分解されたっておかしくないはずなんだけど
そうか・・・もう見えぬが、主を守ったのだな我は・・・
イシュトが危ない。荷物も燃えてしまつたし
どうすればいい。

どうすればこの大きな友人を救える?
くつそつ！結局役立たずなのかよつ

人里なんてないだろ？し、リーシャ達と合流しなくては。
死んでしまう。

だから。

イシュトを背負い引きずる。

火事場の馬鹿力といふやつだろ？

少しづつだが6mの巨体を小学五年生が引きずつていぐ。
熱気を感じ、とっくにジャケットは脱ぎ捨てている。
意識が朦朧とし始めたながらも、ワイヤーバンを放すことなくマドカは
足を踏み出し・・・倒れた。

ダメだ

歩けない

『その意氣やよし 我が倦族を救おうとその小さき身でよくぞ我
が元へたどりついた』

だ・・・れ

『くくく・・・人の子よ。名を尋ねるならば自分の名を先に名乗る
ものだ』

いちか・・・わまど・・・か・・・・

『汝、契約を望むか』

え？

『力が欲しいか』

欲しい。

イシユトを執事長をライ力を、リーシャを守る

力が欲しけ

『汝、契約を望むか』

手に入らな

力が手に入るなら

契約を望む


@かイチカワマドかと契約を結ぶ

卷之三

倒れているマドカの鼻先に黒い影の足先が触れる。

黒い奔流がマドカのナ力にあふれる。

熱が鈍痛が激痛がありとあらゆる苦痛が体中を駆け巡る。

永遠に思えたその一瞬が過ぎ去つたあと、マジカはたくさんの声を聞き、たくさんのが存在を見るようになっていた。

す、とマドカは手を伸ばす。

指先から出た黒い塊がイシュトを包む。

次の瞬間イシュトの傷は癒えていた。

マド・・・力?

「イシコト・・・苦労掛けたね・・・ほんとに でももう大丈
夫。リーシャを探しに行こ!」

(マドカ・・・別人のような気配だが・・・マドカであるな)

目を瞠るような表情でこちらを睨つてぐるイシコトを急かし、真夜
中にも関わらず急に夜目がきくよくなつた瞳を凝らす。驚くこと
もなく自分のチカラを自覚した。

「誰か知らないけど・・・借りはきつたり返せさせてもいい!」

第八夜 契約の世界レイスフィア（後書き）

今回は少し短め。つていうのも次回の構成を考えてのことです。
ようやく主人公が覚醒します。
ペースアップで行きますぜよ！

第九夜 憤怒の世界レイスフィア（前書き）

スロースターターにもほどがある主人公ですがようやく怒り大爆発の八面六臂を書いて嬉しい作者でした。

第九夜 憤怒の世界レイスファア

「 ツ姫様」

しばらく自棄になつていたリーシャを看ながら護衛たちは周囲を警戒していた。

「警戒の網を破られたようです・・・ぞつと二十騎はいます」

「・・・そう。どうやらそいつらがあの砲撃の犯人ね」

機械人形がリーシャの咳きを合図にしたかのように姿を現した。

オート・マタ
機械人形 機械仕掛けの殺戮兵器で、魔術回路と自治領の誇る現代科学の融合で生まれた自律型のゴーレムともいわれる。稼働限界は命令術式の達成を基準とする画期的なシステム。時間拘束を取り払うことで大幅な「ストダウンにつながつたといえる。数で劣る自治領の武力の一つといえる。魔法を無力化する装甲を持ち、物理攻撃も中世レベルの兵器では通らない。

状況はリーシャ達にとって、絶望的と言えた。

打開策の見つからないまま、オート・マタ達の包囲が狭まつていく。

ソグド皇国第三十八皇女リーシャ・コル・ソグディア確認

命令履行開始

ドンッ

赤黒い光線はリーシャと護衛たちの間を抜けて森を破壊した。

「 はずした?」

『馬鹿を言わないで下さいよ・・・くくく・・・少し狩りのお楽し

みを味あわせてもらひうだけです』

「！？」

「・・・自治領ね、ここのりを操つてゐるのは わつきのものあなたたちでしょ！？」

『 御明察、御明察。まあそれくらい誰でもわかりますよねえ・・・くくく』

「こんなことをしでかしてつ 貴様らあああーー均衡を崩す氣か！欲得に惚けた愚か者が シガア」

啖呵にかぶせるように、肩を機械人形が撃ち抜く。

「アルフフ」

「つぐ」

『はははははははあーーあなたがた野蛮人に負けるわけがないでしょーーこの長きにわたる均衡は我々自治領が許してやつた仮初の主権ですよ？思いあがるものいい加減にしていただきたいですねーー下等動物どもがつ』

バスト

ツドン

かすめるよつに穿たれる光線をリーシャ達は避け続ける。風の精霊はいまだにリーシャに力を貸そつとはしない。

ドオオオオン

ギヤアウオオオオーンンンンンンンンンンンンンンンンンン

卷之三

一頭の翼竜について魔光が突き刺さる。

苦悶の叫びをあげてワイバーンは倒れ伏した。

『ねやおや、もう終わりですか。もうと楽しめないと困ったので』

黙れ、
蛆虫が

思念の塊がその場でハウリングする。オート・マタモリーシャ達も全員が動きを止めた。

イシコトを翻るマジカの姿があつた。

「随分好き勝手してくれたようだね」と思うと吐き気がするよ人形どもが」

これが僕の同胞の所業

マドカの周囲を黒い気体とも液体ともつかぬモノが満たしていく。その闇の広がりと共に異常なほど^{ブレッシャー}の圧力が周囲に叩きつけられる。

魔王の様な威圧。

魔王の様な気迫。

闇はオートマタを包み隠し、圧壊せらる。

「 ッチッ！魔力回路くバスくが切れてる、逆探知できないよにしたな。さすがにそこまで馬鹿じやないか・・・」

舌打ちすると、先ほどまでの威圧を嘘のよつにかき消してリーシャ達に駆け寄る。

「リーシャ。怪我ない？大丈夫？平氣？」

「ええええ。それよりあなたたちは平氣なの！？直撃だつたじゃない」

「この通りだよ でも、よかつた・・・。リーシャが無事で・・・ほん・・・と・・・よかつた、うあああああ

ぱりぱりと泣き出すマドカ。

リーシャに駆け寄りながら躊躇って女の子座りになりながら。

泣き疲れてブレーカーが落ちるようパタリと意識を失う。

「 本当にあなたつて子は・・・どうしてこんな

膝枕をしながらマドカの頬をぬつて涙を拭つ。

「でもさっきの力・・・この数時間でマドカに何があつたというの

」

第九夜 憤怒の世界レイスフィア（後書き）

名前が片方出てきた護衛さんアルフさんと翼竜の一頭は手当てを受けていません。放置プレイです。

あと、主人公がチートのように映るかもしれませんのが能力についてはおいおい明らかになります。

主人公がようやくヒーローっぽくなりました。ここまで長かった（

ふう

第十夜 交錯の世界レイスフィア（前書き）

今日は翻訳と余談めです

第十夜 交錯の世界レイスファ

「とりあえずここから移動するけど・・・空路だと地表からまた狙い撃ちにされかねないわ」

「幌馬車を借りましょ、姫様。ワイバーン達は言伝に帰すのです。我々とこれ以上同行すると逆に目印になってしまつ」

「私も同意見です。それに無傷とはいえ、マドカ殿も相当な無茶をなさつた御様子だ・・・。せめて腰を落ち着けさせて差し上げなくては」

「そうね・・・」

三人はリーシャの膝の上で安堵した顔で眠る少年を慈しむように見つめた。マドカの先ほどの異能はなんだつたのか。

そんなことがどうでもよくななるような、それほど邪気のない寝顔だった。

リーシャ邸の厨房

「お嬢様大丈夫でしょうか・・・」

「我ら使用人のできることなど、無事を祈るのみよおおお

だからたっぷりいい礼拝堂で祈つて来おいいと絶叫した執事

長は、本日20枚目の皿を割つた赤毛メイドをたたき出した。
主がいないだけでこの体たらく　情けないなあと、俯きながらア
イカは本館の庭を歩く。

「え　？あれって、お嬢様たちが乗つっていたワイバーン？」

四頭のワイバーンが誰も載せずに、リーシャ邸へと向かつてくるの
が見えた。

化物
化け物
ばけもの
バケモノ

貴様など
お前など
あんたなんて

死んでしまえばいい

「う　あ」

「マドカは小刻みな振動で頭を壁にぶつけて目を覚ました。

「目が覚めたのね。体は平気?」

「り・・・・・しゃ?」

「それ以外の誰に見えるの?」

クスリと悪戯っぽく笑うと、リーシャは御者席の護衛一人に振りかえった。

「お寝坊さんがようやく起きたみたい。あとどのくらいかしづ?」

「それはよかつた! ちょづど皇都の外郭門が見えてきたところです。マドカ殿はまだ観ておられないのでしょうか? 一見の価値はありますよ」

「」

護衛の、先日負傷した方、アルフさんが屈託なく笑いかけてくる。馬車に乗り換えたんだ、と呟いてマドカはリーシャの傍らに座り、御者席の先へと視線を向ける。

地平線の上に白い壁が屹立していた。近づくにつれて、一点の穢れも曇りもない真白な壁に人物や馬、動物のレリーフがくつきりと彫られているのが見えてくる。

「新しいの?あの壁?」

「か・・・壁つて・・・まあ外郭も兼ねてるから間違いじゃないですかね。それよりなんでそう思つんですか?」

「だつて全然古びてないし傷んでないじゃない」

「ああ、あれは古の技術で作られていますので。建国30年記念に作られたものですから、かれこれ1200年前からあすこにあして聳えているんです。もうエルフ族くらいしかレイスファイアでは再現できる種族はいないんじゃないでしょうか」

せんにひゃ・・・つて。平安時代以前からつてこと一? 柄違いなオーパーツだ。

びっくりするマドカにリーシャは言つ。

「まあ、一週間滞在するけど観光はできないって思つておいてね。父と・・・魔王との対談をはじめとして、手続きみたいなもんとか社交界の面通ししどくこととかね。つまらないことだけどこれが結構、手間と時間がかかるつちやうものなのよ」

さいですか・・・。

皇族宿舎の個室に辿り着いたリーシャとマドカは安楽椅子に腰かける。

侍女たちの淹れた香草茶をひとしきり味わつてようやく人心地がつ

いた。

ふう、とため息をついてハーフエルフの皇女は異界の少年に話しかける。

「ねえ。落ち着いたら聞こいつて思つてたんだけど・・・」

椅子のクッションに埋められたマドカの背が小さく跳ね上がる。

「な・・・何?」

「・・・あのとき、あなたが私たちを救つてくれた時あなたは明らかにあなたじやなかつた。離れている間に何が起きたの?」

「 ッ

あの時、機械人形オート・マタを駆逐した時、明らかに自分は人間を辞めていた。

・。

もつと根本的なところを言えば、力に・・・全能感に酔つていた。

昨日の悪夢の通りになつてしまつのではないか。

力に溺れてしまつのではないか。

僕はその時、リーシャを壊してしまうかもしない。嫌われてしまふかもしれない。

そんのは・・・イヤだっ

「『めん・・・僕にもよくわからないんだ』

だから嘘をついた。

自分を守るために嘘をついた。

リーシャは・・・何か言おうと口を開きかけて、閉じた。

マドカにはそれがありがたく思えた。

第十一夜 幕間の世界レイスファア（前書き）

幕間なのでけつ いひ短めです。なんといふか第十夜と第十一夜は自分としてはかなり難産でした。

第十一夜 幕間の世界レイスファイア

宿舎の夜。

リーシャは明日以降に控えた父皇との対峙を思い、闘志を奮い立たせていた。

絶対にマドカは渡さない。

政治の道具になんて、まして戦争の道具になんてさせない。初めての友達だから、命の恩人だからこそ、ソグドをレイスファイアを嫌いになつてほしくはない。

いや、違う。私自身を嫌いになつてほしくない。

「寝るつ」明日は戦だ。

第38皇女は執事長が見たら憤死しそうなほどに行儀悪くベッドに飛び込んだ。

マドカは夢の中、白い部屋にいた。まわりは眼に痛い白一色。光源がどこにあるのかも不明だ。

『・・・イチカワマドカ。そつきぶりだな』

最近聞き覚えのある声が反響した。

(出たな。あんたどこのどいつなんだ)

『命の恩人に詮索か？感心せんな
人の悪そうな笑い声が響く。』

(あんた、たしかあの時契約つて言つてたな！どうこいつ意味なんだ。契約つてのは相互に債務を負うつてことだ。あんたは僕に力を貸しているのかもしれない。じゃあ僕は何をするんだ？何をさせられるつ)

嫌みを無視するとはなかなか肝つ玉が据わつてゐる、と笑う気配があり、

『頭の回転は本当にその年にしてはよく回る方だの。何、大したことではない。・・・暇つぶしだ』

(ひま・・・つぶしだと)

『我のところまで辿り着く二ングンなど久方ぶりなのでな。しかも、我が倦族を救うために扉を開いたのだ。興味深い・・・実にな』

(扉・・・？また訳の分かんないことを。それよりーあんた名前なんて言つんだ、僕は名乗つたろ)

『ぞんざいな口調だな・・・まあいい。契約の刻はお前にはバスが通つていなかつたからな。真名が聞こえんのも無理はない。私は、竜族の王、黒き鱗の竜ザラマンデルだ』

(ザラマンデルつてのが名前なのか?)

『まあ、そうだな。ワイバーンども倦族とは違い、神祖の血統を継ぐ貴族ならば名の前に受け継がれてきた血族の呼び名を持つ慣わしなのだ』

(・・・結局僕にさせたいことつてないのか)

『特段ないな。お前がこの世界を見聞きし、思うまま行動するがいい。もう我が特性たる「夜」はお前に根付いた。どう使うかはお前次第だ』

（僕次第・・・）

『たつぶりとお前が、イチカワマドカがこのレイスファイアで何をなすか見てやる』

高らかな哄笑を残して人影は去った。

第十一夜 幕間の世界レイスファイア（後書き）

いよいよメインタイトルに偽りなしと胸を張つて言えそうです。ふう
え？わけわかんねーよつて？大丈夫！張つた伏線は全て回収作業し
ますよ。（た・・・たぶんね
お気に入り登録4件が増えました。ありがとうございます。

第十一夜 夜会の世界レイスマニア（上）（前書き）

間が空いてすいません。え・・・誰も待ってない・・・だと。
期待してもういえるように頑張ります（シクシク

第十一夜 夜会の世界レイスファイア（上）

「きひひひひひひひひはははは

」

人影は人体としてはありえないほど仰け反つて、爬虫類じみた舌を出し晒し続ける。

「竜王 退屈と怠惰の王よ！…余程の玩具か？その童わらわがああ

ひどく愉快そうな調子の声にもかかわらず、その表情は暗く、歪んでいる。

「久しく地上など興味もなかつたが、羽虫ニシゲン共がどこまで思いあがつてゐるか見物しに行くのも一興か」

そう囁くと人影は眼下に見える雲海へと飛び込んで行つた。

謁見の当日 。

外交大使が真っ先に通される玉座の間には大勢の人間が集つていた。吹きぬけの大広間にエスニック調の調度品がしつらえられている。マドカは知る由もなかつたが、建物を含め中近東などのイスラム圏の伝統様式に酷似している造りだ。貴族たちの纏つている衣服の意匠もイスラム風だつた。

遠巻きの貴族の雰囲気を感じたのか、リーシャは切れ長の両目で回りを抑え込むような視線を叩きこむ。ざわついている貴族たちもこの圧力には屈していた。

「ほう　。貴様が厄介事の種か？この忌まわしい厄種め！…さつさと神聖なる皇都から出てゆけ！…」

「雑種がつ」

「皇女殿下といえど38番田ではな・・・たらしこむ相手を間違えたのではないか？くくく」

後ろから後ろから怨嗟嫉妬罵詈雑言が一塊りになつて一人に吹きつける。

横を歩くリーシャは表情も変えず悠然と歩いてるよう見える。だけど、その手は白くなるほど堅く握りしめられていて、怒りを押さえこんでいるのがわかる。

憎い親父さんは魔王様、周囲も大貴族ばかり、か　。さすがに波風立てるのは自重してるのでな。

まあ、一応「渦中の人」だしな、僕らは。

ヒ、1人の優男が進路をふさいだ。

「キミの様な庶民の入つていいい場所ではないのだよ？」・こ・は。分かつたなら今すぐ皇女殿下から離れて」

「失せろ！優男」

「ソソソソソソソグディア四大貴族に名を連ねるボクをぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ侮辱したなつ！…」

脳にあるスイッチを意識的に入れる　。そんなイメージ。たつたそれだけでマドカのプレッシャーは跳ね上がる。有象無象の貴族など物の数ではなかつた。

「ひつ」「一警しただけで優男はその場に釘づけになつた。

もう振り向かずに少年は、ソグド魔王ムジカ・ゴル・ソグディアの下へゆつくりと歩いていく。

「貴様　。魅入られたか？」

ソグドの王はピクリと眉をしかめながら、それでも愉しそうに訊いた。
ぞくりと悪寒を感じるような表情で、しかし声だけは朗らかに少年は応える。

「　違こまぬよ。向ひつが僕に惚れたんだ」

「ほう　その力どう使ひ？..」

「僕は僕の味方にこの力を捧げる　それだけだ」

「ぬかしあつてえええ……雑種があー皇の御前であるぞー……控えよー！」

頭のてっぺんが寂しい側近が叫ぶ。

「　よい。細かいことを申すな。異界の民には我らと違つ理がある」

「ひつ

皇は左手を激高した貴族　マダカにすれば中年の脳髄のうずいたおじさんのにかざし、制した。

「別に今は（・・）、ソグド皇国に審意はありませんよ」

マドカは両肩をすくめる。先ほどからリーシャは責ざめて息遣いがわずかながら乱れているのを感じている。やはり、過日の一件帝都スイルベーンの反乱は尾を引いているらしい。今日のところはここで引きあげた方がいいだろつ。謁見自体はすんだとみなしてもいいのだから。

「今は　か」

「ええ今は（・・）ね」今日のところはこれで失礼します、と踵を返す。

「また訪ねてくるがいい。貴様はいろいろ面白い　イチカワマドカ」

機会があらば　と12の少年は小生意気に応えた。

最後までリーシャはソグド皇と田を合わせることはなかつた。

「どうやら皇都に入つたようだね」

太り氣味の時代が1人だけ違うような洋装の男が咳く。

「ソグドに渡すには惜しいチカラですしね　今の私たちへの心証

は正直良好とはいえないでしょ。ですが皇都内部でひと悶着起
せばとりあえず勢力の天秤を動かすことはできます」
眼鏡を掛けた細身のスーツに身を固めた男がひどくいやらしい笑み
を浮かべる。

「火種は幸いあります。ほどあるし　といつわけか？」

「そういうことです」

自治領の会議室に陰謀の晒し合いだました。

第十一夜 夜会の世界レイスファイア（上）（後書き）

ここから同タイトルで中、下と続く予定です。
べべべべべべ別にタイトルのネタ切れとかじや・・・ないんだか
らねつ（涙目）
お気に入り登録五件だそうです。ありがとうございます――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7597m/>

異世界の竜騎士物語

2010年10月13日06時56分発行